



TITLE:

2-6 動物"パーソナリティ"の生物学的基盤に関する種間比較研究

AUTHOR(S):

今野, 晃嗣

CITATION:

今野, 晃嗣. 2-6 動物"パーソナリティ"の生物学的基盤に関する種間比較研究. 霊長類研究所年報 2010, 40: 129-129

ISSUE DATE:

2010-09-21

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166809>

RIGHT:

輝度配置だが、輪郭の配置をずらすことにより、長方形が分断されたように見える間隙条件の 3 条件でテストした。チンパンジーの標的への反応時間は、隠蔽条件と透明視条件で間隙条件よりも短くなった。このことは、チンパンジーが透明視を知覚し、透明視によって 1 つとなった物体全体を賦活するような注意過程があることを示唆しているが、条件間の反応時間の差は、先行刺激と標的が 2 つの長方形のうち明るい長方形に出現する条件では有意ではなかった。そこで、刺激の輝度を調整して再度実験したところ、今度はどちらの長方形に出現したときでも、透明視を示唆する反応時間のパターンが得られた。

2-6 動物“パーソナリティ”の生物学的基盤に関する種間比較研究

今野晃嗣（東京大・院・総合文化）

対応者：友永雅己

本研究の目的は、動物の“パーソナリティ（以下、性格とする）”の測定とその生物学的基盤について多面的アプローチにより明らかにすることである。昨年度までに、飼育スタッフの評定に基づいて飼育下の霊長類（ニホンザル）や鯨類（バンドウイルカ・ベルーガ）の性格を測定した。その結果、尺度の内的整合性及び複数の評定者間の信頼性が高いことが示され、動物の性格評価を行う際にも心理測定学的手法が有効である可能性が示唆された。今年度は、劇的な環境変化が飼育下動物の行動パターンにどのような影響を及ぼすかといった応用的問題を検討するために、チンパンジーサンクチュアリ宇土（CSU）から京都市動物園に移送された 4 個体のチンパンジーを対象に行動観察と Quality of Life (QoL) の評価を行った。行動については 1 分毎の行動データを収集して各個体の日常的行動配分を調べ、QoL については WHO のチェックリストに基づいた質問紙を用いて飼育スタッフが各個体の QoL を評価した。移動前（CSU）、移動後（京都）、移動後半年後（京都）の 3 地点において継続的な記録を行った結果、移動前後の行動に関して顕著な個体差が見られた。オトナオス 1 個体とオトナメス 1 個体の行動パターンは移動前後で比較的安定しており、時間の経過につれて QoL も増加する傾向にあった。一方、他のオトナメス 1 個体と人工哺育の若メス 1 個体は移動が増加したり屋外運動場に出なかったりといった行動が頻出したことに加え、とくに心理学的領域の QoL が移動前よりも減少傾向にあることが示された。

2-7 チンパンジーの描画行動に関する研究

齋藤亜矢（東京芸大・映像）

対応者：林美里

描画行動の認知的な基盤とその進化的な起源を明らかにするため、霊長類研究所のチンパンジーとヒト幼児約 30 名を対象に比較認知科学的研究を継続している。これまでの研究では具体的な物の形を描く表象描画の起源に焦点をあてており、刺激図形を用いた課題場面の設定により描画行動を解析してきた。今年度はより詳細な解析を可能にするため、タブレット PC 用の描画解析ソフトの開発、および刺激図形の準備を進めた。またなぐりがきから表象描画への移行期のヒト幼児が、顔などの表象を倒立や横向きで描く「さかさ絵」についての研究もおこなった。縦断的な描画観察から出現頻度や年齢をまとめるとともに、刺激図形を用いた描画課題を設定して、さかさ絵がいつ、どのように出現するのかを検証した。さかさ絵が出現しやすい時期の前に、目などの部位が不完全な混沌顔が出現しやすい時期があることから、さかさ絵の出現と幼児の概念形成とのかかわりが示唆された。これらの結果について第 21 回日本発達心理学会大会で発表した。これまでに共同利用研究でおこなってきたチンパンジーとヒト幼児の描画比較研究について The 3rd International Workshop on Kansei で発表し、「がんばれ！図工の時間」フォーラムでは、一般向けの講演をおこなった。

2-8 光学的流動知覚の比較認知科学的検討

白井述（新潟大・人文）

対応者：友永雅己

生後 1-5 ヶ月齢のニホンザル乳児を対象に、放射状の拡大・縮小運動の検出における速度感度の発達を選好注視法による実験手続きによって検討した。放射運動（拡大運動か縮小運動のいずれか）パターンと並進運動パターンを繰り返し対提示し、放射運動パターン側を選択的に注視する頻度を分析した。過去数年の間の実験結果を含めて、以下のような結果を得た。すなわち、(1) ニホンザル乳児においてもヒト乳児と同じような拡大検出バイアスが存在すること、(2) ただし、ニホンザルでは刺激パターンの速度が高い場合には、放射運動検出そのものが困難であり、ヒト（パターン対の速度が高いほど放射運動検出の成績が良くなる）とは異なった放射運動速度感度の傾向を持つことが明らかとなった。これらの成果は Experimental Brain Research 誌（2010 年、202 巻、319-325 頁）に原著論文として掲載された。

今後は、チンパンジーなど他の霊長類においても同